は琉球と記す、此國虬（キウチ）の大海の中に蟠る如くなれば、流虬と云しと云々、按るに流虬の說心得られず、我國の書に見えし處は、往古鎭西八郎爲朝、大海の流に隨ひて求め出されし國なれば、流求と記と云、此說も誤れり、夫より先倭漢の書に皆々流求と記たり、又一說に、龍宮と云し也、我國の書に龍宮と云習はせるは此國也といふ、是も亦心得られず、只何となく古よりりうきうと云しを、後に漢字を假りて流求共、琉球とも記せし成べし、

〔倭訓栞前編三十八〕りうきう　琉球、瑠球、流求、龍宮など書り、今中山と稱す、慶長十九年、王自來朝す、南島志に、山海經の南倭也といへり、明史に、万曆四十年、日本果以勁兵三千入其國虜其王還遷其宗廟、大掠而去と見ゆ、薩州の兵の時也、安永四年五月に、志摩鳥羽浦に漂流す、十二三間の船也、船主照屋筑登之、船頭宮里と、水主以下十八名、髮結たる所に銀の笄二本を指り、又眞鍮とあり、

〔中山聘使略〕國號

琉求隋書　流鬼（リウキ）新唐書　是流求の下音の約りたるなるべし、瑠求元史　瑠球粵志　留仇續文章正宗　留求性靈集　流球三善清行が智證大師の傳　流虬（リウキウ）中山世鑑　琉球同上　明の洪武琉球と改むといへり、玄かれ共宇治大納言の今昔物語に、仁壽三年、宋の商人良暉が琉球へ漂流の事を載て、琉球の名あれば、唐宋よりありし名と見えたり、中山（チウザン）むかし琉球分れて三つとなり、中山、山南、山北といふ、各王あり、其後中山王南北を一統したれば、中山の名は止むべきなれ共、舊によりて今に中山といふなり、清より冊封の詔書にも、なを琉球國中山王といふ文あり、掖玖日本紀　掖玖の唐音ウエキーなり、今薩音にて琉球をリユキーといへば、掖玖も琉球の轉音なり、夜句同上　夷邪久隋書　此は隋の時夷邪久といひしにあらず、煬帝二年、朱寬海に入て異俗を求る時琉球に至り、撫すれども從がわず、其布甲を取て返る、時に日本の使是を見て、此は夷邪人の用る處也といひしを聞て書したるにて、隋の時彼方にて元より夷邪久といひたるにはあらず、彝邪久續弘簡錄　うるま